

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第2号 花き

発行日 平成28年 4月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net/agri/>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんどう 株仕立ての徹底、土壌水分管理、雑草防除を適正に行いましょう。
- ◆ 小ぎく 晩霜対策・初期生育促進のためトンネル等の被覆を実施しましょう。定植、整枝などの作業を計画的に進めましょう。

りんどう

1 生育の状況

露地栽培では、3月の気温が高めに推移したことから、全体的に萌芽や展葉が平年より早い傾向にあります。

また、今年定植用の苗は、補植や間引き作業が始まっており、順調に推移しています。

2 圃場管理

(1) 灌水

圃場が乾燥すると生育に大きく影響します。乾燥しないよう適量の灌水を行って生育を促してください。通路(うね間)灌水の場合、根の障害を避けるため、気温が高い時間帯を避けて曇天の日や夜間に行います。また、長時間の滞水は避けてください。

(2) 株仕立て

株仕立ては、1株当たりの立基本数を制限することで切り花品質を確保し、株の衰弱を防ぎ収穫年数を確保するために必要な作業です。株当たり7~8本を目安に整理しますが、株が弱い場合は収穫する茎を減らします。作業が遅れないよう留意し、草丈が30cm頃までに終えるようにします。ウイルス病の伝染を防ぐため、刃物は使用せずに手で折り取ります。

また、間引いた茎葉は、病虫害予防のため、必ず圃場外へ処分します。

(3) 追肥

春の基肥に「りんどう一本勝負」を使用した場合や、定植時に「りんどう定植2年肥料」を使用した場合、2年目の追肥は基本的に不要です。ただし、葉色が薄い、生育が緩慢な場合には追肥が必要です。

ア 追肥時期

基肥に「りんどう専用肥料」や「CDU S-555」を使用した場合、通常は施用後約1か月で肥効が切れますので追肥が必要です。花芽分化の時期に肥料分が不足すると花段数の減少やボリュームの低下など品質が劣る場合があります。

追肥時期は早晩性に併せて調節し、側芽が見える頃までに終えるようにします。

イ 追肥量

追肥には窒素・カリ成分が主体の速効性肥料を使用し、施肥量は窒素成分量で5~8kg/10aを基準とします。一度に多量の追肥を行うと根を傷める等の危険があるので2~3回に分けて施用し、葉が大きい、葉色が濃い場合は追肥を控えめにします。

(4) 雑草対策

気温上昇に伴い雑草の生育も盛んになります。遅れないよう早めに対処します。適用のある除草剤を有効活用するとともに、株の周辺は手で抜き取ります。

(5) 生理障害対策

葉先枯れ症状は、生育が盛んになる 5 月上旬頃から発生し、急激な茎葉伸長時の圃場の乾燥と石灰分の生長部での不足が要因とされています。圃場の乾燥を防ぐため、状況を見ながら灌水を行います。

また、薬剤散布時に石灰資材を混ぜて葉面散布を行うことで被害の軽減が期待できます。



葉先枯れ症状

3 病害虫防除

リンドウホソハマキの幼虫は、枯れ茎の中で越冬します。残っている枯れ茎を早めに除去し、圃場外へ処分します。

生育初期は葉枯病とハダニ類を中心に防除します。いずれも初期の罹病や寄生がその後の拡大の元となるので、初期防除を徹底します。

前年にハダニ類が発生した圃場では、残茎中などで越冬した成虫が新しい茎へ移動し、茎の伸長とともに中上位葉へ寄生が広がっていきます。葉裏をよく観察して発生状況を把握し、多発する前に薬剤散布で防除します。ダニ剤は同系薬剤については年 1 回の使用とし、葉裏にムラのないように散布します。

4 施設栽培

施設での促成・半促成では、花芽分化期までは温度を維持しますが、それ以降は徐々に温度を下げ、最低気温が 10℃を上回るようになったら施設を開放して茎の軟弱化を防ぎます。

病害虫では、リンドウホソハマキやハダニの発生時期になっています。圃場をよく観察し、発生初期に薬剤散布し防除します。

5 育苗

間引きや移植が終わる播種後 30 日頃から液肥による追肥を開始します。苗の生育状態をよく観察し、施用してください。

発芽が遅く、種皮が子葉から取れにくかった品種では、アルタナリア菌による苗腐敗症の発生が多くなります。本葉 2 対目が出始める時期に適用殺菌剤を散布し、病勢進展を抑制します。

小ぎく

1 育苗

育苗期間中は、気温 15~20℃を目標に管理します。夜間はトンネルなどで保温しますが、日中は 20℃を越えないように施設やトンネルを開放し換気します。この時期は施設内の気温が急に高くなり、例年トンネルの開け忘れによる高温障害や、過度の遮光による発根の遅れがみられるので、管理には十分注意してください。

挿し芽時期は定植日の約 2 週間前に設定し、5 月上旬から中旬に行います。

2 圃場準備

小ぎくは根が浅く張るため、過湿による生育不良が発生しやすくなります。排水不良となりやすい水田転作畑等で栽培する場合は、明渠、暗渠等の排水対策を講じます。また、湿害を避けるため、高畦で栽培することも有効です。

3 定植

8 月咲き品種は 4 月下旬から 5 月上旬、9 月咲き品種は 5 月下旬から 6 月上旬が定植期となります。老化していない苗を植えることが基本となりますが、気温が低い場合は天気予報に留意し、降霜が予

想される場合は定植を避けるようにします。

また、草丈が伸びにくい品種は早めに、伸びすぎる品種は遅めにするなど、品種の特性ごとに定植時期を調節します。

土壌が適度に湿った状態で定植し、定植後は灌水を行って土を落ち着かせてください。

4 定植後の管理

(1) 晩霜対策

5月中旬頃までは晩霜の心配がありますので、霜害の軽減と低温による活着や生育の遅れを防ぐため、ポリフィルムや不織布を用いた保温・防霜対策を行ってください。

トンネル被覆は初期の生育確保や草丈が伸びにくい品種の品質確保にも有効です。

なお、トンネル被覆を行う場合は事前に十分に灌水を行うこと、密閉せずに換気口を開けることを忘れずに行ってください。

(2) 灌水

定植後に土壌の水分が不足すると根の発育が抑えられて生育が停滞します。圃場が乾燥しないよう適宜灌水を行います。初期生育が不足して後半に旺盛な生育となった場合、草姿が乱れる原因となるので留意します。

(3) 摘心

摘心は定植後に活着を確認してから芽の先端部を小さく摘み取ります。大きく摘心すると側枝の発生数が少なくなることがあります。摘心漏れがないように、作業の数日後に圃場の見回りを行いましょう。

省力化を目的に定植前に摘心する事例も見られますが、品種によっては側枝の発生が少なくなる場合がありますので、品種に応じた作業を行います。



(4) 土寄せ

無マルチ栽培では、側枝が10cm前後に伸びた頃、および整枝後の2回を目安に実施します。

土寄せを行うことで新根の発生を促し、生育を旺盛にすることができることから切り花のボリューム確保に有効です。また、中耕を兼ねることで雑草の抑制効果もあります。

5 病虫害防除

白さび病は親株から感染した苗を圃場に持ち込んで発生することが多いので、生育初期から予防散布を徹底します。薬剤はローテーション散布に努めます。

この時期、アブラムシ類やナモグリバエの発生がみられますので、初期の防除を心がけてください。

春の農作業安全月間実施中！ [4月15日]
[~6月15日]
「気をつけて！ 互いに声かけ 農作業安全」

次号は5月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。